ニューヨーク補習授業校だより

架け橋

令和７年（2025年）１月17日　　第33号　　校長　小島　昇

書き初め

新年を迎え、ＬＩ校とＷ校の両校で書き初めの授業を実施しました。日常的に筆や墨を使って字を書く機会は減っています。慣れていないこと、馴染みのないこと、上手にできないこと等に対して「面倒くさい。やりたくない。」といった意識をもつ児童生徒もいたようですが、書き初め会場では、皆が落ち着いて筆を持っていました。





また、今回の書き初め授業では、保護者ボランティアの皆様が墨汁の補充や児童生徒が書き上げた作品の移動を担ってくださいました。そのため、児童生徒は会場内を移動する必要がなく、落ち着いて書字に集中することができました。さらに学級担任だけでなく、多くの運営スタッフの協力があり、授業は円滑に進行していました。加えて、最後の中高等部の授業後の最終片付けでは、生徒たちが率先して片付け作業に取り組んでいる姿があり、頼もしく思いました。補習校の行事は、いつもたくさんの人の協力で成り立っていると感じていますが、今回もまたそうでした。





幼児部から中高等部まで学ぶ補習授業校

これまでも子どもたちが補習校で学ぶ様子をお伝えしてきていますが、先日のW校での授業から印象的な場面をご紹介します。



幼児部では、初等部への進学に向けてひらがなの学習を進めてきています。先日の授業では、お正月遊びの一つとして、自分たちで作ったかるたで遊びました。読み手を交代しながら、グループごとに仲良くかるた遊びを楽しんでいました。



次に訪れた初等部１年生の教室では、先生と一緒に全員で国語の教科書を音読していました。教科書を手に持ち、良い姿勢で音読しています。4 月に初等部に入学した子どもたちの１年間の成長を感じます。補習校の授業は週に１日だけですから、その１日の授業だけでこれだけ自信をもって音読ができるようになるとは思えません。きっと毎日の音読の宿題に取り組み、ご家族の皆様にもそれを聴いていただいて、その毎日の積み重ねの結果としての姿だったのでしょう。



中等部の数学の授業では、確率を学んでいました。2 枚のコインの表裏の出方を実際に試し、楽しみながら理解を進めていました。一人の生徒が、どうして「表裏」が出る確率が一番高いのか、ホワイトボードに書いて日本語で説明し、他の生徒はそれを一生懸命聴いて理解しようとしていました。

どの教室でも、それぞれの発達段階に応じた学びができていることを確認することができ、嬉しく思いました。